

イザヤ四〇章—五五章全体より見た 主のしもべ像

鍋 谷 堯 爾

福音主義神学会が三年前の四月二七日に発足してから、四回目の総会を迎えることになりました。私は、神学会が発足して間もなく、一九七〇年九月から昨年六月まで、約二年間、北米セントルイス市にあるコンコーディア神学校に留学してりましたが、この間、福音主義神学会が着実に成長される様子を見て、心から感謝をしておりました。私が日本を出発したのは、ちょうど万博の最中でした。それは、戦後の日本が、ほんとうの意味で終った年であったと思います。それまでは、戦後の廢墟からの復興、さらに、日本有史以来の経済的発展を享受しながらも、日本人の精神構造そのものには、大きな変化はなかったように思われます。「長生きすることはよいことである」「速く目的地に着くことはよいことである」「お金がたくさんたまることはよいことである」といった価値基準が疑われることはありませんでした。しかし、この二年の間に、疑いえなかった価値基準が動揺し、混乱し、しかも、分裂動揺は今後も増大すると考えられるのです。

いっぽう、このような激しい変化と混乱の社会にあつて、キリスト教会はどうであつたでしょうか。それは、あいも変らぬ混沌と停滞であります。しかも自由主義といわれる陣営だけでなく、私たち福音主義と呼ばれる陣営においても、教勢の頭打ち、従来の政策にたいする疑い、無気力感などが侵透してきております。

こうした教会内外の危機にあつて、福音主義神学会が誕生し、「聖書は誤りのない神の言である」との確信に立つて、学問的な弁証を試み、聖書の奥義が、より明らかに、教会の内と外とに示されるように努力していることの背後には、主キリストの父なる神の深いみ旨のあることを確信しております。

神学研究と信仰とのかかわり

今晚、私がお話しする講演の主題は、「イザヤ四〇章—五五章全体より見た主のしもべ像」であります。しかし、これをイザヤ書の統一性とか、「主のしもべとは、いったいだれか」という現在でも最も重要な神学的問題のひとつになっているテーマに、学問的な光を与えようとするものではありません。そうではなくて、私がイザヤ書のみ言を信仰的な立場でどのように受けとってきたか。また、どのようにしてイザヤ書研究に導かれて今日に至ったか。今日のイザヤ書の神学的課題を、自分の信仰とどのようににかかわらせているか、という、神学研究と信仰のかかわりについて述べさせていただきたいと思ひます。それはまた、聖書の客観的真理性と、主観的経験の關係について、ともいえるでしょう。そして、この問題は、福音主義神学を神学しようとするすべての方々の問題でもあると思ひます。

私が、イエス・キリストを信じて洗礼を受けたのは、今から二一年前のことであります。それは、大学在学中に結

核にやられて、もう駄目かと思っていた時、聖書のイエスのみ言にふれたのです。「わたしは、よみがえりであり、いのちである。わたしを信じる者は、たとひ死んでも生きる」というみ言により、イエスは、死の床にあった私に迫ってこられました。私は、その意味はよく判らなかつたけれども、このみ言に人生をかけました。イエスを救主として受け入れました。そして、いやしを経験しました。しかし、今、考えてみますと、聖書に示されている罪についての認識はなかつたようです。イエスを救主、また、いやし主として経験はしたけれども、あがない主としては知らなかつたわけです。その自覚、経験をしたのは、聖書を毎日読みはじめ、聖書の言を実践し、イエスに従おうと努力しながらも、それができない自分の姿を知らされてからのことです。クリスチャンである自分が、クリスチャンらしくあるうと欲すれば欲するほど、理想の姿から離れて行くことを体験してからのことです。受洗後数年も経つたある日のこと、何気なくイザヤ五三章を開きました。そして四節から五節を読みました。それまでも、イザヤ書は何度か読んだことがあります。又、イザヤ五三章についての説教も聞いたことがあります。しかし、その日、五三章四—五節が、特別に、私自身のものとして迫ってきたのです。

「まことに彼は、われわれの病を負い、

われわれの悲しみをになった。

しかるに、われわれは思った。

彼は打たれ、神にたたかれ、苦しめられたのだと。

しかし、彼は、われわれののがのために傷つけられ、

われわれの不義のために碎かれたのだ。

彼はみずから懲らしめをうけて、

われわれに平安を与え、

その打たれた傷によって、

われわれはいやされたのだ」

聖霊は、このみ言を、私とキリスト御自身の間の具体的事実として、その時、私の前に示して下さいましたのです。

その後、私は、ルーテル教会の神学校に奉職し、旧約を教えるようになり、とくに、イザヤ書を自分の専門とするようになりました。六年前には、許されて、ウエストミンスター神学校で、あのヤング博士の下で、イザヤ書を研究いたしました。ヤング博士は、一九五九年、プロテスタント宣教百周年にあたって、大阪で聖書信仰同盟の大会が開かれた時、来日講演されました。私は、その時、講演を聞きながら、このような神学者の下で勉強できたらと夢みたくわけですが、それがはからずもかなえられて、一九六七—六八年、ウエストミンスター神学校に留学、博士の下で親しく、イザヤ書を研究させていただいたわけです。博士は、不幸にして、一九六八年二月一四日、心臓麻痺で急死されましたが、その一週間前に完成したのが、昨年、ニュー・インターナショナル・コメンタリーのイザヤ書第三巻として出版されました^①。

一九六八年に帰国した私は、再度、コンコルディア神学校に留学、今回も、イザヤ書を研究テーマといたしました。

み言の権威と統一性

さて、ここで、私が、旧約、とくに、イザヤ書を自分の研究のライフワークとしている事実と、自分のイザヤ書、

とくに、五三章四—五節より与えられた個人的な信仰体験とのかかわりということを考えてみたいと思います。

今述べましたように、私がイザヤ書を研究するように導かれた背後に、イザヤ書のみ言による信仰的な体験があったことは否むことができません。そして、そのことは、福音主義神学を志す多くの方々の体験であると思います。じつに、神のみ言は、私たちの思いをはるかに超えた方法で、人の心の奥底に突き刺さり、あるいは罪を示し、あるいは、救主を示し、あるいは叱責し、あるいは慰め、励ますのです。そして、それはしばしば、コンテキストから離れ、あるいは、コンテキストを理解することなしに、直接的に、ある状況におかれていた魂に神の語りかけとして迫るのです。イザヤ四〇章三一の「主を待ち望む者は、新たな力を得、わしのように翼をはって、のぼることができるといふみ言によって、肉体的励ましと共に、霊的勇気づけを与えられた人がどれほど多いことでしょうか。また、四三章一—二の「恐れるな、わたしはあなたをさがなった。わたしの名を呼んだ。あなたはわたしのものだ。あなたが水の中を過ぎる時、わたしはあなたと共にいる。川の中を過ぎるとき、水はあなたの上にあふれることはない」といふみ言が、ここでの「あなた」がだれであるかといういくつかの学説とか、この背景にある出エジプトの枠と捕囚からの関係を理解することなく、直接、困難の中にある魂への語りかけとして受けとられ、霊的力となったことがどれほど多いことでしょうか。私たちは、コンテキストを離れた断片的なみ言の効力の不思議さというものをけっして無視することはできないのです。

私の教会にかつて、ひとりの方が、日曜礼拝の最中に居眠りをしておりました。その時、突然、神の言が落雷のように耳もとに響きました。

「眠っている人よ、起きなさい。死人の中から立ち上りなさい」。

彼は、身体的な眠りからさめただけでなく、霊的にも覚醒しました。

これは、笑い話でなく、アウグスチヌスの回心の例を見ましても、断片的な聖書の言の不思議なお働きに、私たちは、しばしば出会うのです。昨春秋、私は、関西における聖書信仰同盟の大会で、逐語霊感説の今日的な意味は「權威」であるということを申しました。そして、このような不思議な断片的なみ言のお働きは、神的「權威」をあますところなく示しているといわねばなりません。

しかし、「聖書は誤らない神の言である」という原則は、今ひとつの大きな真理を含んでおります。それは「統一」という原理であります。もし、この「統一」という原理を失うならば、聖書霊感説とか、福音主義信仰はかたわらになるでしょう。日本における福音主義陣営といわれる教職、あるいは、信徒指導者は、ある一回性の状況における断片的な神の言の語りかけを、あたかも、すべての状況に適用されるすべての人へのメッセージのごとく考え、み言の自由な語りかけと、力とを受けとる柔軟性を欠こうとしているのではないのでしょうか。神的「權威」を如実に示す、聖書の断片的引用が「權威」の概念をいささかも失うことなく、「統一性」の概念にたえずかわりをもたせられていくように努力するところに、福音主義神学の大きな責務のひとつがあると思われまします。

私の場合にあてはめますと、イザヤ書五三章四—五節によって贖罪信仰の根拠を与えられながら、それがイザヤ五三章のコンテキストの中で今一度見直してみる。さらに、イザヤ書全体に、預言書全体に、旧新約聖書全体に拡がってゆく。そして、統一的新旧約全体の姿の中で、自己の信仰的根拠を改めて問い直すという間断のない努力であるうと思えます。しかし、この作業は、けっして簡単ではありません。「統一性」とは、具体的にどのようなことを意味しているのでしょうか。それでまず、機能的な面を考えてみましょう。

統一性の機能的な面

私の属しているルーテル教会では、聖書日課というのがありまして、毎日曜には、旧約からひとつ、使徒書からひとつ、そして、福音書からひとつテキストがえらばれています。しかし、私の知るかぎりでは、牧師は、なるべく旧約のテキストを避けて説教します。まれに旧約が引用される場合には、ノアの箱舟とか、アブラハムの召命とか、試験、ダビデの信仰などの他に、コンテキスト抜ききの聖句の断片的引用であります。

ある時、私は、ひとりの説教者が、イザヤの召命について説教するのを聞きました。ごぞんじのように、イザヤ六章の有名なテキストです。彼は言いました、「皆さん。この六章一節にウジヤ王の死んだ年と書いてあります。ウジヤ王の死んだ年、イザヤは神殿にのぼってゆきました。彼の心は、王様が死なれたという悲しみの気持で、いっぱいになっておりました」。多分、この説教者は、明治天皇の死と、国民の悲しみのようなものを類推していたかも知れません。しかし歴史志二六章にあるウジヤの生涯と、高慢の結果による悲惨な晩年を読むならば、「ウジヤ王の死んだ年」というひとことには、ちがった意味が含まれていることが判ります。ウジヤ王の時代、ユダ国は、ダビデ、ソロモン以来の繁栄を享受しました。しかしそれは一時的でした（それは今の日本の状況に似ております）。ウジヤ王は一時的な繁栄に心おごり、王の職分を忘れて、大祭司の職分である祭壇に香をたく仕事をやろうとしたため、神の怒りにふれ、らい病になりました。「ウジヤ王の死」とは、おこれる者への神のさばきの終局を示し、一時的な平和と繁栄に酔うユダヤの国民にも、やがて「神のさばきが」くるといふことの予表であり、警告であったわけですから。こうして見る時、前七四〇年頃といわれるイザヤの召命の歴史的背景の理解は、ちがったものになります。

統一性の神学的側面

宗教改革者たちが考えも及ばなかった、考古学的、言語学的研究の進歩、新しい写本の登場を背景にして、機能的な面から、聖書の統一的理解をたえず進めてゆく義務を、「み言の役者」はもっているわけですが、同時に、神学的側面からも、統一性の理解を深めてゆかなければなりません。

イザヤ四〇―五五章の著者性の問題と、そこに描かれている「主のしもべはだれか」という問題こそは、五書批評と並んで、今日においても、旧約神学の姿勢とレベルを問われる試金石であります。

イザヤ書の著者性については、先日のキリスト新聞、三月二四日号と三一日号に、名尾耕作先生が、「イザヤひとりもの」と「一つの交響楽とみて」という表題で、統一性を支持しておられました。名尾先生の論拠は、三つに大別することができます。第一は、一章一節の表題が、イザヤ書全体に及ぶということです。第二の論拠は、四〇章以下の主題が、バビロン捕囚からの解放ではなく、メシヤ待望であるということです。第三は、新約聖書の証言です。

この名尾先生の発言は、第一、第二、第三イザヤ、さらに後世編集加筆を考える今日の批評家たちの前に、大手を拡げて「統一性」を弁護しようとする勇氣ある態度と思えます。

つぎに「主のしもべはだれか」という問題ですが、福音主義信仰に立つ者ならば、これはきたるべきメシヤであり、イエス・キリストにあつて、その預言が成就したと答えるでしょう。はじめに述べました私の個人的信仰体験も、イザヤ五三章三―五節の「主のしもべ」をそのままイエス・キリストと受け取った上に成立しています。しか

し、それが、四〇章以下における「主のしもべ像」としてはどうか。旧約全体における「しもべ」という語の用法からいってどうなのかと問いかけてゆくとところに、神学的な統一性とかかわりがでてくるわけです。イザヤ四〇—五五章に現れる「主のしもべ」については、今日でも議論が百出しており、大別すると集合的解釈と個人的解釈に分けられます。集合的解釈では、イスラエルを指すわけですが、これが預言された当時のじっさいのイスラエルを指すのか、さばきの後、残されたイスラエルを指すのか、理想のイスラエルを指すのかによって意見が分かれております。また、個人的解釈は、モーセ、エレミヤ、エホヤキンなどの歴史的人物を指すとすると、預言者自身を指すとすると見方と、メシヤ説があります。さらに、集合的解釈と個人的解釈を折衷した流動説というのがあります。これらについては、日本語ならば、榎原先生の訳されたヤングのイザヤ五三章、中沢氏の「苦難の僕」、英語なら、ノースの「第二のイザヤの苦難の僕」によく紹介せられております。

私は、この問題を考察するにあたって、二つの点を指摘したいと思います。じつは「主のしもべ像」は、五三章だけでなく、四二章一九、さらに、四九章一—六、五〇章四—九も、そうではないかと考えられていることです。注目すべきは、それと併行して、四一章一—七、二三—二九、四四章二—四、四五章七、四五章一一—一三、四六章一一、四八章一五と、いわゆるクロス預言が現れているわけです。この「主のしもべ」に関する預言と、クロス預言の関係を、四〇—五五章全体の中で、どのようにして統一的にとらえるかということが第一の問題点です。批評家たちの常套手段は、「主のしもべ」に関する預言はひとまとめにし、クロス預言はひとまとめにし、偶像礼拝に関する預言はひとまとめにして、それらの内容にたいする主観的判断によって、あるものは、第二イザヤに、あるものは、後期の編集者のものにと帰するわけですが、それによって、現在あるがままの聖書の配列の背後にある意味を見失ってしまっています。通説によれば、第二イザヤと呼ばれる無名の預言者が、前五五〇年後、バビロン捕囚の地において、アンザ

ン王クロスがメディアを奪取したとの報に接しました。彼は、このクロスに、ユダヤ人解放の期待をよせて、クロス預言をするのでありますが、やがてクロスがバビロンを占領してユダヤ人を故国に帰還させただけでなく、マルドク神など異教の神々を拜むのを見て、はなはだしく失望し、新しく理想のメシヤ像をうたいあげたのが、「主のしもべ」預言であるということです。この場合、前五三八年頃を契機として、クロス預言と「主のしもべ」預言の間に断絶を考えるのが特徴です。これにたいして、私は、むしろ、配列の順序からみても、両者の間に連続性をみたいのです。この場合、見逃されがちなことは、イザヤ四〇—五五章の背景には、出エジプトが前提せられており、バビロン捕囚からの解放は、第二の出エジプトとして考えられていることです。同じ神が、ご自身の民を奴隷の地から、奇蹟的な方法であがない出される。この場合、クロスと主のしもべは、新しいモーセとして考えられています。

第二の問題点は、四〇—五五章だけでなく、イザヤ書全体を貫いて流れている「心かたくなさ」の思想であります。私たちは、イザヤ六章の召命の記録の前半を読んで発憤し、感謝しますが、しばしば、九節以下を見逃します。神の聖と、そのみ前における自己の汚れと、一方的な恩寵による罪のゆるしを経験したイザヤに、神は問いかけられました。「わたしはだれをつかわそうか。だれがわれわれのために行くだろうか」。その時、イザヤは、「ここにわたしがおります。わたしをおつかわしてください」と答えました。

従来の説教とか、聖書講解は、ここで終ることが多いのです。なぜなら、このあとには、理解することが、はなはだ困難な「心かたくなのメッセージ」がつづいているからです。イザヤ自身にとっても不可解であったことは、彼が「主よ、いつまでですか」と聞いていることから明らかです。おそらく、イザヤは、預言者として召されて間もなく二〇才位の青年であったと思われる。これにたいして、主は「町がこわされ、国土が全滅し、生き残った人た

ちも捕われるまで」と答えられました。それは、イザヤの全生涯のはるか彼方、百数十年もあとの、バビロン捕囚を指しております。イザヤはその生涯において、アハズの治世下にも、サマリヤのかんらくした時にも、ヒゼキヤのいやしの時にも、前七〇一年と考えられるセナケリブの侵入の時にも、一貫して「心かたくななメッセージ」を宣べ伝えたのです。神の愛でなく、神の怒りを伝え、罪のゆるしでなく、さばきと滅びを宣べ伝えた預言者でした。三八章における病いのいやしの奇蹟も、三六一—三七章におけるアッスリヤ軍撃滅の奇蹟も、原則的にいうならば、「心かたくななメッセージ」の現れであります。

さて、四〇—六六章の後半においては、このメッセージは、偶像礼拝の諸形態として現れております。また、五五章まででは、第二の出エジプトという輝かしい神の約束への不信として現れてまいります。このことを理解する時、第二の出エジプトが、神の「新しい」出エジプトであると呼ばれている意味が理解されてきます(四三章一六一—九、四八章六)。「新しさ」とは、たんなる「新奇さ」ではなく、「人の心のかたくなさ」と対比せられる「新しさ」であり、「新しい出エジプト」とは、神が一方的な主権をもって、この「心かたくなさ」を打ち破られる事件に他なりません。それは時代の流行の先端を行く新しさでもなく、実存的な意味での新しさでもなく、霊的な「新しさ」であり、神の絶対主権が保有する「新しさ」です。

このように見てゆく時、クロス預言がまず四一章にあらわれ、ついで、「主のしもべ像」が四二章に、それから又、クロス預言が四四章以下に現れるという順序も、両者を非連続線上に見るのでなく、「新しいモーセ」という連続線上に見るので、そのままの順序で理解せられるわけです。

ふたたび神学研究と信仰のかかわりについて

イザヤが、全生涯をかけて、ただ「心かたくななメッセージ」を語り伝えなければならなかったということは、人間的にいうならば、失望と苦々しさの連続であったということです。二〇才ほどの若さで、「心かたくななメッセージ」を伝えよと言われた時、それが国土の決定的な破壊の日までと言われながら、彼には、まだ若さによる楽天的な希望もあつたかもしれません。一方では、イスラエルの首都サマリヤの陥落の日は、ユダも預言どおり滅亡するかと覚悟したでしょう。人間的には、悲喜こもごもの中に、しかも、神の民の背信と罪深さをより見させられ、失意と絶望を深められてゆくなかに、他方では、神の絶対的主権と栄光の輝きを、よりいっそう見させられた預言者、というふうに理解する時、一章から三九章までと、テーマも文体も異った四〇章以下の内容と、そこに示される「苦難のしもべ」像も、イザヤ書全体の統一性の中に定置できるのではないのでしょうか。そして、そこでは、学問的な作業を超えた霊的洞察というものが必要とせられるようです。日本の苦悶する主の教会に仕えるみ言の役者として、普段の神学的研究の必要と、普段の霊的覚醒の必要の接点が、ここらあたりにあるのではないのでしょうか。

註

① Edward J. Young, *The Book of Isaiah, Vol. III, Chapters XL-LXVI*, The New International Commentary on The Old Testament, Grand Rapids: Eerdmans, 1972.

② イザヤが召命を受けたのが、このイザヤ六章の体験を最初とするか、それとも再召命であるかについては、意見が一致していない。最初の召命体験であるとするか、一章一節の表題をどう考えるか。また、一章―五章の預言は、いつなされたかという問題が生じるが、ヤング博士はじめ多くの注解者は、最初の召命体験とする。カルピンは、再召命の体験であり、イエスの弟子たちのように召命は、困難な働きに面する時に、再確認される必要があるとする。また、手塚氏は、たんなる歴史的記録というよりもその後の実さい経験に照らしつつ、省察吟味せられて、精練された信仰的記録であるとする。また、ウジャヤ王の死んだ年については、前七四八年から七三四年の間に諸説がある。

③ 神戸ルーテル神学校神学誌第三号（一九七〇年）一七一―一八ページに、イザヤ書の新約での引用表がでている。

④ ヤング著、榎原訳「イザヤ五三章」いのちのことば社、一九六一年。中沢治樹著「苦難の僕」新教出版社、一九六四年。
C. R. North, *The Suffering Servant in Deutero-Isaiah*. 2nd edition. London: Oxford Press, 1956.

（神戸ルーテル神学校教授）